



吉岡英幸・本田弘之編

日本語教材研究の視点 新しい教材研究論の確立をめざして

くろしお出版、2016年発行、233p.

ISBN : 978-4-87424-716-7

深澤 のぞみ

1. 日本語教育における教材研究と本書の目指すもの

日本語教師同士が顔を合わせて雑談をするときに、必ずと言っていいほど出る話題の一つに、教科書の話がある。「この教科書を使っているけれど、学習者のレベル差が大きいクラスでは使いにくい」とか、「新しく出た話題の教科書を使ってみたら意外によかったので、来期からもこれを使い続けるつもり」等々、尽きることがない。また日本語教師は、多くの教科書や教材が次々開発され市販されている現在でも、教えているクラスにちょうどいい教材がないとなると、自分で作ろうとすることさえある。しかしこれほど日本語教師にとって大きい関心事である教科書や教材について、教師個人の経験や勘が教科書の選定や開発の拠り所になっていることも多く、専門的に取り上げて調査や研究をしてみようとすることは、あまりないのではないだろうか。

評者は所属する日本語教員養成課程で「日本語教科書研究」という授業を開講しているが、この授業で参考にできる専門書はないだろうかと探したことがある。そのときに見つけたのが、一冊は本書の編者である吉岡編（2008）『徹底ガイド 日本語教材』であり、もう一冊が岡崎（1989）『日本語教育の教材—分析・使用・作成—』であった。そしてこれ以外にはほとんど研究書がなく、論文もそれほど多くないというのが実情であった。本書はこのような日本語教材をめぐる現状に新風を吹き込もうとしたものであり、日本語教材について本格的に学び研究しようとする大学院生や研究者を対象とした研究入門書である。

2. 本書の概要

まず本書の概要を紹介する。本書は、編者をつとめた吉岡と本田を含めて10人の書き手が、各々の視点から教材について述べた論文集に近い内容の書籍である。それぞれの筆者が教材研究の現状や問題点、教材研究のために必要な参考文献の紹介、そして教材研究の方法論を取り上げ、論を展開している。第1部「日本語教材の歴史」（第1、2章）と第

2部「日本語教材の分析」(第3、4、5章)、そして第3部「日本語教材の使用」(第6、7、8、9章)から成り、教材を縦断的に見る視点、横断的に見る視点、そして実際の運用を見る視点と、教材研究の全体像を浮かび上がらせるための視点がそろっていることがわかる。

第1部第1章の吉岡論文は、戦前も含めた120年間に渡って日本語教材がどのように変遷したかを、実際の教材の調査をもとに論じている。この吉岡論文では、長年の教材研究の蓄積をいかし、歴史的な経緯を振り返り、変化とその評価を見定めることの重要性を気づかせてくれる。第2章の金論文では、同じく日本語教材の歴史の変遷を扱っているが、その研究の対象になったのは、韓国の高等学校で用いられてきた日本語教科書である。韓国では、最近まで反日感情のある中でも学校教育の中で外国語教育の一つとして日本語教育が長年行われてきた。その韓国における日本語教科書に現れている日本への否定的な記述に焦点を当て、考察をしている。

第2部からは、様々なタイプの日本語教材の分析事例が紹介される。第3章の河住論文ではこれまでほとんど取り上げられなかった日本語教材研究を行う際の枠組みについて、既存の研究のレビューを行なった上で、枠組みの試案を提示した。第4章の義永論文では第二言語習得研究の知見を生かして、日本語初級教科書での受身の扱いについて分析し、さらに昨今の言語学習観の転換の日本語教材への影響についても調査している。第5章の中俣論文は、現実の言語使用と日本語教科書のズレを浮かび上がらせることでコーパスを用いた分析の有用性を明らかにしたものである。

第3部は日本語教材の使用という観点からの論文で構成されている。第6章荒川・木村論文では、教材と教員の関係について、専門分野に特化された日本語教育の場を例に分析を試みている。第7章は日本と中国と両国で日本語教育を経験した李が、教材を授業で使うことの実際を考察し、さらには教材を使わない授業についても論じている。第8章の山田論文では、現代の日本語教育における教材を論じる上で、重要な位置を占めつつあるICT (Information and Communication Technology) との関係を整理し、「何をどう教えるか」が先に来るICT活用が必要だと主張する。最終の第9章本田論文は、「産業としての日本語教育」が進む中、日本語教材の内容だけの研究では十分ではなく、教材と教師、そして学習者との相互関係に焦点を当てる必要性を提言している。巻末資料として、くろしお出版のWebサイトからダウンロードできる『日本語教材目録データベース』について、作成者の田中が解説している。

以上が本書の内容の概要である。

3. 日本語教材研究の意義とこれからの課題

3.1 本書の意義

ここまで見てきたように、本書は日本語教材について多角的な視点からの分析を行い、目配りのきいた内容となっており、まさに待望の書と言ってもよいものである。考えてみれば、日本語教師の関心の中心である教科書や教材について、実はあまり研究がされてこなかったというのは不思議な現実である。

昨今の日本語教育は社会のグローバル化現象の影響を受け多様化が進んでいるが、それ

に伴った日本語学習者のニーズ変化を前に、日本語教師は日々必ずしも教科書がうまく適合しない状況の中で苦悩することになる。そこで日本語教師は、自分の授業に教科書の内容をカスタマイズしたいいわゆる「プリント」を作っていこうとする。こうした動きに合わせてか、国際交流基金の『国際交流基金日本語教授法シリーズ 14 教材開発』（2008 年）や、スリーエーネットワークの『日本語教育叢書 つくる』シリーズ（関正昭・平高史也編、2010 年からこれまでに会話教材、漢字教材、読解教材、作文教材、聴解教材、テスト、教科書のテーマで 7 冊が出版されている）など、教材や教科書を作るための理論や具体的なノウハウがまとめられた書籍が出版されるようにもなっている。評者自身、これまでも新しいニーズのために教材を自作してきた経験が少なくなく、教材の自作そのものを否定するつもりは決してないが、教科書の中に出てくる地名を使用する場所の地名に変更するなどの修正を施しただけの「プリント」を多く作り、授業中に配布するなどのやり方では、出版されている教科書をただ消費するだけのことになってしまはいらないか。そのような危惧を持ち続けていたところ、本書に出会った。教科書を様々な立場から分析的に見る態度が、教科書を十分に使い尽くすためにはぜひ必要である。そのための視点を、本書は教えてくれる。

ただし、本書にももう一つ加えたい視点がある。それは教材の作成者とその作成意図という視点である。完成した教材が作成者の意図そのものだという考え方もあるだろう。しかし、いわゆる検定教科書の場合には、指導要領などの国で定めたシラバスが存在するので基本はこれに沿っており、また日本語の初級教科書のようにすでに出版されているものが多い場合には、既存のシラバスを参考にしながら、具体的な内容の検討がなされるため、必ずしも作成者の意図のすべてが反映されるわけではない。また、日本語の中上級以上の教科書や全く新しい分野の専門分野の教材開発の場合には、シラバスの検討から始めることになるのが普通であるため、ある程度シラバスが固まっている場合と比較すれば、作成者の意図が取り込まれやすいと言える。シラバスの検討にせよ、既存のシラバスに基づく具体的な指導項目の選定にせよ、そこには膨大な調査研究の結果や作成者である教師自らの経験の蓄積が知見となり、教科書の理念となって貫かれているはずである。作成者の意図と具体的な教科書の内容との関係には、表面には現れない問題が含まれていることもある。

評者は大学院生の TA に、留学生のための日本語のクラスの授業の一つを事前事後の指導を行った上で担当させているのだが、事前指導の場でこのようなことがあった。初級文型に必ずと言っていいほど入っている文型に「～てはいけません」というものがある。ある日本語教科書では、この「～てはいけません」を、友だち同士が電車に乗っていて、片方が携帯電話で話しているのを見てもう一方が「電車で携帯電話を使つてはいけませんよ」と注意する場面をイラストで提示している。TA の学生が、自分たちは友だち同士と言えども、直接このような言い方で相手に注意することはしないけれど、これを留学生にこのまま教えて大丈夫かと質問してきたのである。確かに客観的な事実として「電車の中では携帯電話で話してはいけません」とか「私の研究室では、食べ物を食べてはいけません」などのように描写することはあるかもしれない。しかしこの表現で誰か他人を注意すると、関係が険悪になることや、見知らぬ他人であれば気分を害されて最悪のケースで

は暴力を振るわれる心配もなくはない。ではなぜこの教科書にはこのような形でこの文型が入っているのか、たまたまこの教科書の編著者に会う機会があり、直接聞いてみたところ、「～てはいけません」は初級文型として扱われるものであり、日本語能力試験にも出題されることがある文型であるため、この教科書の中心となる対象者が日本語学校の学習者であることを考えると扱わないわけにはいかないという回答であった。そのかわり、「～てはいけませんよ」と「よ」という終助詞を加えることにより、相手への語りかけの印象を付加するようにしたとも述べた。この考え方が妥当かどうかについては多くの見解があるであろうが、教科書のこの事項を見るだけではわからない、作成者の意図が種々存在することがわかる。前述の TA 学生が考えたのと同じ疑問を持った日本語教師は、「～てはいけません」は授業から外してしまおうと考えるかもしれないし、あるいは別の「プリント」教材を作って配布しようとする考えるかもしれない。しかしその前に、作成者の声をよく聞き理解しようとする努力が必要なのではないか、そしてそのための視点もまた必要なのではないかと感じた。

3.2 これからの課題

前節でグローバル化が進んだ結果、日本語教育に多様化による変化が生まれたと述べたが、現在では、教育全体に大きい変化の波が押し寄せてきていると言われている。21 世紀は「知識基盤社会」であり、新しい知識や情報、そして技術があらゆる領域で重要な役割を果たす時代である。知識や情報はグローバル化の時代、瞬時に人々が手に入れることができ、技術革新も日進月歩である。このような時代には従来と同じような、多くの知識や技術を取り入れるというだけの教育では不十分であり、自分自身の力で何が必要かを判断して情報や知識を習得し、さらにその情報や知識を利用して、課題を発見解決し、新しい価値を創造していく力が必要だと言われている。このような能力を具体的に記述したものとしては、21 世紀型スキルやキー・コンピテンシーなどが代表的である。たとえば 21 世紀型スキルは、これからの時代には ICT を使いこなしながら変化や進歩の多い時代に順応して知的な活動をすることが重要であると考え、そのために必要な能力を、「思考の方法」「働く方法」「働くためのツール」「世界の中で生きる」という四つのカテゴリーと 10 のスキルとして定義している。

この 21 世紀型スキルが必要とされる時代に、日本語の教科書や教材はどのように対応していくのであろうか。評者は、先日興味深い経験をした。評者が所属している日本語教育学会の地区支部集会が夏に行われ、そこで新しい試みとして、最近急速に広まっている「ビブリオバトル」（自分の勧める本を持ち寄り、5 分のスピーチを行なった後、参加者が投票を行なって「チャンプ本」を決めるという書評ゲーム）を応用し「ビブリオバトル風わたしのお勧め教材紹介」という活動が行なわれた。この際には、現役日本語教師（母語話者教師だけでなく、非母語話者教師、さらにベテランも比較的日本語教師歴が浅い教師も含まれていた）や日本語学習者である留学生など 8 人がスピーチを行なった。そして当日の参加者による投票の結果、同点で二冊のチャンプ本、すなわち参加者が自分が使いたいと思った教科書が選ばれた。一冊が『留学生のためのケースで学ぶ日本語—問題発見解決能力を伸ばす』（江後他著、2016 年、ココ出版）ともう一冊が『協働で学ぶクリティカ

ル・リーディング』(館岡洋子編著、2015 年、ひつじ書房)であった。どちらの教科書の発表者とも、これまでの通常の日本語の読解授業や作文授業では日本語学習者の満足が得られないという悩みを持っていたところ、これらの教科書に出会い、単なる日本語の学習だけでなくもっと深く学習者に考えることを促す授業ができた、という主張を行っていた。奇しくもチャンプ本に選ばれた二冊の教科書は、どちらも日本語学習者がテキストのテーマを自らの問題ととらえ、対話をしながら深い思考を行うことを目指したものであった。現在の日本語教育の場で、日本語教師が、あるいは日本語学習者が皆いわゆる 21 世紀型スキルということを意識している訳ではないだろう。しかし現代は世界のどこにいても、日本や日本語の最新の情報を手に入れることができ、日本語母語話者とインターネットを通して直接話することも可能な時代である。教科書やそれを使った教室での学習だけが、日本語を学ぶ手段であるのとは訳が違う。学ぶ内容や手段にも大きい変革が起こりつつあるということ、このことを敏感に感じ取った結果が、二冊のチャンプ本なのではないだろうか。

日本語教材研究はこれからさらに、世界の教育観の変遷や教育効果を上げるための教育のデザインを考えるインストラクショナルデザイン (Instructional Design) の考え方も取り入れ、今後も発展していくことが期待される分野である。そのためにも、本書で示された多様な視点からの研究の意義は極めて大きい。

付記

この原稿を事務局に送った直後に、吉岡英幸先生の訃報を知りました。吉岡先生と直接の面識はありませんでしたが、先生の教材についてのご研究をこれまでずっと追いかけて来ました。拙稿をご覧いただき、お話しする機会が得られたらと楽しみにしていたのに残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

参考文献

- 岡崎敏雄 (1989) 『日本語教育の教材—分析・使用・作成—』アルクオンデマンド BOOKS
 グリフィン, P・B. マクゴー・E. ケア編 (三宅なほみ監訳) (2014) 『21 世紀型スキル 学びと評価
 の新たなかたち』北大路書店
 吉岡英幸編 (2008) 『徹底ガイド 日本語教材』凡人社
 平成 17 年中央教育審議会答申「我が国の高等教育将来像」
 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm> (2017 年 9 月 5
 日)

(ふかさわ のぞみ 金沢大学人間社会学域国際学類)